タバコとタバコ包丁の歴史

メモ） 鉄本 （2023. 12. 22）

【はじめに】

タバコは、南米アンデス高地を原産地とするナス科の植物である。アメリカ大陸の先住民は紀元前8000年頃からタバコの栽培を始めたと推定されている。中央アメリカのマヤ文明の人々は、喫煙を精霊との対話を行う宗教的儀式の手段として行っていた。コロンブスが新大陸を発見した大航海時代を契機にタバコは世界に広まった。

ここでは、日本へのタバコの伝来と、タバコ包丁に焦点を当てる。

1．日本へのタバコの伝来

（1）喫煙風習の伝来

①屏風絵からの考察

図は観能図（8曲1隻）の一部　　桃山時代/17世紀初期　　出典：神戸市立博物館

この屏風絵は、天正13年（1585）の秀吉関白叙任祝賀能、あるいは文禄２年（1593）の禁中能のいずれかを描いたものと比定されている。南蛮人の姿があり、長い煙管を吸う従者の姿も描かれている。この絵から秀吉の時代には、日本人も喫煙を行っていたと想像されるが、屏風絵の考証から後世の絵師が想像を交えて描いたと思われる。南蛮人が煙管で喫煙している姿は、他に金沢本泉寺所蔵の「南蛮図屏風」にも見ることができる。

②古文書からの考察

【多田家文書「たばこ役算用状一覧」】

石見銀山の銀の積み出し港であった**温泉津（ゆのつ）**の旧家・多田家に伝わるタバコ陸揚げ量を記載した文書「たばこ役算用状一覧」で、寛永8年（1631）から寛永21年（1644）までの文書である。これによると寛永8年（1631）1年間のタバコ陸揚げの合計数量は約9600kgとなっている。このタバコは乾燥した**葉タバコ**であり、銀山で働く鉱夫の生活保障策の一部として葉タバコから作られた**刻みタバコ**が与えられた。鉱夫の住居跡からは煙管（きせる）が出土しており、また、「石見銀山稼方絵巻」（個人所蔵）に描かれている鉱夫喫煙図（右図参照）からも鉱夫が喫煙していたことが判る。

【中村家文書『邑智(おおち)郡大林村銀山屋敷帳』】
大林村は石見銀山の広域経済圏に含まれ、銀、銅の産地である。ここの慶長7年(1602)検地帳「邑智郡大林村銀山屋敷帳」に、「たはこ弥三郎、儀三郎」の屋号と思われる「たはこ」の文字が見え、タバコを商う店があったことが伺える。

【『梅津政景日記』】
秋田県湯沢市に近い**院内銀山**に残る『梅津政景日記』(銀山奉行梅津政景の日記)には、銀山町の**たばこ営業許可鑑札**、**たばこ営業税**の取り決めが書かれている。慶長18年(1613)のたばこ営業税の運上請額は半年間で6貫100匁(現在価値で約60万円～90万円)とある。慶長19年(1614)の日記には、葉タバコは越後で求められたものとの記述があり、この時期には葉タバコの栽培が東日本まで拡がっていたことが判る。

【『鹿苑日録』】
京都相国寺鹿苑院の僧侶が記録した『鹿苑日録』には、文禄2年(1593)に鹿苑院主が「烟草」を携えて外出したという記述があり、僧侶の間にもタバコ喫煙が広がっていたことが判る。

【『坂上池院日記』】
京都の医家、坂家の『坂上池院日記』には、慶長12年(1607)の記述に「このころ、たばこということはやる、これは南蛮より渡るという、広き草の葉をきざみて火を付け、煙をのむ」とある。

【17・18世紀の文献例　タバコ伝来の記述】

文献	刊行年	編・著者	記述	伝来時期
羅山文集	1661	林羅山	四十年来蛮船載来有	1620頃
本朝食鑑	1692	人見必大	種を本邦に移すこと六・七十年に過ぎず	1622～1632
和事始	1697	貝原好古	慶長十年の此はひ始めて日本に渡る	1605
煙草考	1708	向井震軒	天正慶長之間或ハ元亀年中 始植地＝東土山	1570～1573 1573～1615
大和本草	1709	貝原益軒	天正ノ初年ナルベシ或日、慶長十年初テ来ル	1573・1605
和漢三才図会	1715	寺島良安	天正年中、南蛮の商船が　始植地＝長崎東土山	1573～1591
落穂集	1728	大導寺友山	天正年中	1573～1591

出典:『世界喫煙伝播史』 鈴木達也　思文閣出版　2015　から抜粋

(2)タバコの種子の伝来

日本のタバコの歴史は、南蛮貿易⇒タバコ喫煙の風習の伝来⇒タバコ種子の持込⇒葉タバコ耕作地の拡がり⇒タバコ喫煙の流行という経過を辿る。

①古文書からの考察

【キリスト教修道士古文書『ペドロ・デ・ブルギーリョス報告書』】
慶長6年(1601)、マニラから来日したヘスス神父が徳川家康にタバコから作った膏薬とタバコの種子を献上との記載が『ペドロ・デ・ブルギーリョス報告書』(マドリード王宮図書館所蔵)にある。この種子がどのように扱われたかは不明。

＜注記＞この報告書に記述されている種子は、薬用タバコの種子であり喫煙用ではないと考えられているが、喫煙用として栽培に回された可能性は否定できない。

【平戸英国商館長 R・コックス日記】
元和元年(1615)、幕府のたばこ禁制令により、松浦藩で約240kgの葉タバコが焼却されたという記述。
元和2年(1616)、12kgのタバコを購入し江戸に送ったという記述。

【伝承】

慶長6年（1601）、肥前国平戸（長崎県平戸市）に来航したフランシスコ会員ヒエロニムス・デ・カストロが、平戸藩主松浦鎮信にタバコの種子を贈呈したという伝承がある。

（平戸市亀岡神社に「たばこ種子渡来之地」の碑　次項の写真参照）

【参考】 タバコに関連した江戸幕府の政策

1605年頃より、近畿方面で喫煙が急速に流行し、喫煙がかぶき者（反幕府集団）のシンボルと見られ江戸幕府は度々タバコ禁止令を出したが、効果はなかった。禁止令は元禄期まで続く。

・元和2年（1616）： タバコ栽培の禁止令　禁煙令

タバコ栽培によるコメの作付面積の減少を憂慮した江戸幕府はタバコ作付面積の半減令を毎年布告したが、8代将軍吉宗によって殖産奨励政策によってタバコ禁止令は終止符が打たれた。

(3) 近世におけるタバコの伝播と葉タバコの栽培地

①タバコ始植地

【平戸説】慶長6年（1601）、フランシスコ会カストロから藩主松浦鎮信にタバコ種子を贈呈したという伝承。右写真参照

【長崎説】慶長10年（1605）、南蛮よりタバコが伝来。「烟草初植地」の石碑。『長崎古今集覧』によると、トードス・オス・サントス教会（現、春徳寺）で栽培された。

【鹿児島・指宿説】

【南部葉説】「慶長の頃、外船県下釜石港に漂着し、煙草の種子を漁民に与えしより、云々」の記述。

「日本最初 たばこ種子渡来之地」の碑
長崎県平戸市　亀岡神社（平戸城跡）

②タバコの伝播における3つの特徴

・国内において葉タバコは陸奥を除いて、本州に広範に普及している。これは葉タバコが環境への適応性が高く、変異性に富む性質によることによる。

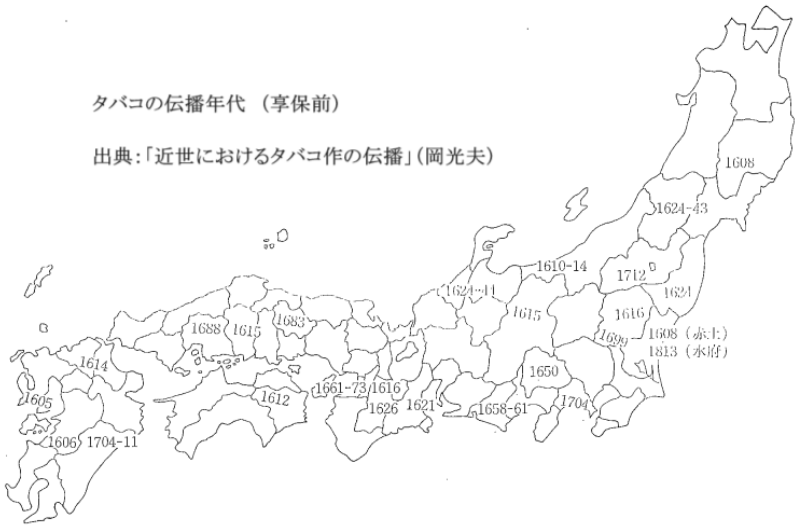
・慶長から元和にかけての初期におけるタバコの伝播の担い手は、僧侶であった。中世末期から近世初期にかけて、農産物の伝播や土木工事において僧侶が果たした役割は大きく、タバコの伝播も同様であった。

・サツマイモはタバコと同時期に伝来しているが、サツマイモが北限に達するのに200年を要している一方、タバコは50年余りの超スピードで伝播している。これは、タバコの嗜好性、中毒性によるところが大きく、元禄期には5・6歳の子供にまで流行したと言われている。（河内屋五兵衛 『河内屋可正旧記』 清文堂）

③タバコの主産地

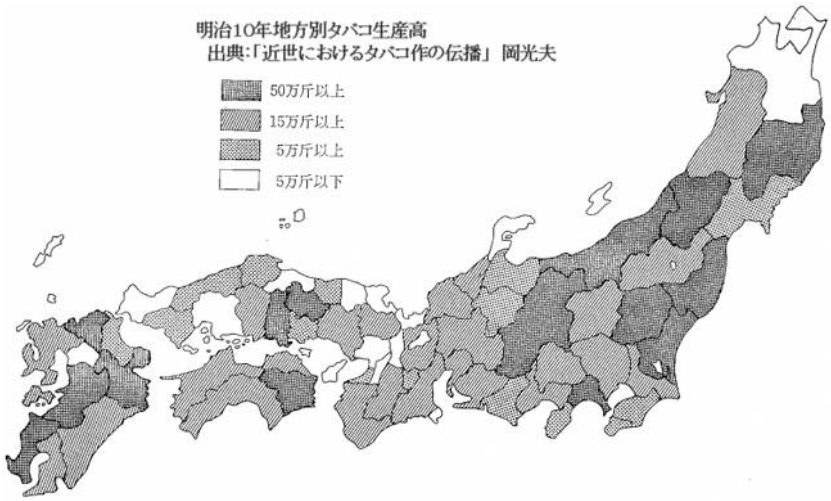
明治10年（1877）の記録では、生産第１位は九州、ついで中部、関東、奥羽の順である。この4地域で全体の68％を占めている。一方、中国、近畿、四国の合計生産量は全体の32％である。

この差は、タバコは畑作であり、葉タバコが軽く運搬が楽であることから山間部での栽培が可能であること、一方、西日本では水田率が高く山間部が少ないことによる東西日本の地形の差によるものである。



明治10年　地方別タバコ生産量

地　域	生　産　量	比　率
奥　羽	4,059,015斤	16.0%
関　東	4,205,317	16.6
中　部	4,859,830	19.2
近　畿	2,157,088	8.5
中　国	3,447,820	13.6
四　国	1,239,399	4.9
九　州	5,383,600	21.2
計	25,352,069	100



【参考】1斤＝600g

上図において、
全国合計は、約15,211kg
となる。

2. タバコ庖丁の起源と歴史

タバコの流行により、寛永3年（1626）に大坂城代阿部備中守の命により、堺でタバコ包丁が試作された。堺包丁の名声が上がるにつれて、同業者数が増え、また、「**似せ銘**」の煙草庖丁も現れたため、享保15年（1730）に堺煙草庖丁鍛冶31株の「堺煙草庖丁鍛冶仲間」が成立した。同仲間は冥加金30両の上納を条件として、「**堺極**」**という添極印**の許可を得た。

（1）2つの伝説「**おたか庖丁**」

伝説1：　天正年間（157～91）に堺綾之町中浜住人の手名長兵衛が剃刀の製造に長じ、その妻「おたか」が大坂城に出入りして売り捌くうちに、その切れ味が太閤の知るところとなり、タバコ庖丁製作の命を受けることとなった。長兵衛は舶来品に劣らない切れ味の良い庖丁を作り名声を得た。大坂城内では、妻のおたかという名だけ知られていたため、「尾方の庖丁」と呼ばれていた。これが民間に伝わり「おかた庖丁」と名称が起った。（岸和田藩高松胤『煙草庖丁由来書』

伝説2：　堺刃物の旧家である石割家の祖先である梅ケ枝七郎右衛門が、煙草庖丁の需要が起るにつれて、独特の鍛冶法で鍛える際に、向う槌を妻の「おたか」が打ったので、これが評判となり、おたか庖丁の名で世の評判となった。この庖丁は非常に硬く石でも割れるというので石割庖丁とも呼ばれることと

なった。以来、分銅印の中に「**石割**」と刻して商標とした。

2つの説のうち後者を一般に信ずべきものとしている。(『堺市史』など)

(2)煙草庖丁の歴史と「堺煙草包丁鍛冶仲間」結成

①煙草庖丁の成立時期: 寛永3年(1626)、剃刀鍛冶であった石割作左衛門、文殊四郎左衛門、丁子吉左衛門、分銅又市、坂本伊左衛門らに対して、大坂城代が煙草庖丁の試作を命じた。

②堺煙草庖丁の発展期: 元禄末期～享保期(1704年頃～1732年頃)、4代目石割作左衛門の時、石割庖丁が全国的にその名が知られる。

③「似せ庖丁」の出現: 堺煙草庖丁の名声が上がるにつれて、「似せ庖丁」(偽ではなく「似せ」)が出現。

・最古例; 元禄2年(1689) 堺正銘「おたか善四郎」に対して「おくた谷次郎」という似せ銘

・元禄12年(1699) 堺正銘「石割作左衛門」に対して「右割佐左衛門」という似せ銘

・享保16年(1731) 関東方面にて粗悪品が出現

堺正銘「岡本佐左衛門」に対して「鬼本佐左衛門」という似せ銘

堺正銘「又市」に対して「文市」という似せ銘

以上は一例であるが、元禄期には堺の鉄物鍛冶は110軒、きせる鍛冶21軒など多数の鍛冶があり、これらが本職以外に片手間仕事として煙草庖丁を作って、「似せ」または紛らわしい銘を付けて売り出した。

④鍛冶仲間の結成: 享保15年(1730)、利益を侵害されるという危機感を持った堺煙草庖丁鍛冶が31株の株仲間を願い出る。冥加金30両の上納を条件に、「堺極(さかいきわめ)」という添極印の許可を得る。同時に、大形(長4寸5分 幅3寸7分)、中形(長4寸4分 幅3寸3分)、小形(長4寸4分 幅2寸8分)の3通りの尺巾寸法を申請して独占を図った。

⑤鍛冶仲間の統制の乱れ: 宝暦期(1751～)以降になると、煙草庖丁鍛冶の徒弟、手間取職人などが関係して、品質的にも正銘品と変わらない仲間外庖丁が出回る。徒弟制度が崩れ、技術上の秘密保持に重点を置く必要性が生じるようになる。

⑥仲間の階層分化: 宝暦期には煙草庖丁の年間製造数が40万枚という数字に達し最盛期を迎える一方、鍛冶を営むには資金が必要であり、財力のある「銀主」と、財力がなく「銀主」に依存するものに分化される。親方の中には下請鍛冶を持って自らは鍛冶を行わないもの存在も出てくる。

⑦煙草庖丁鍛冶株の廃止: 天保13年(1842)

明治末期以降は最盛期の三分の一に衰退。さらに、手刻みが機械に置き換わり煙草庖丁は姿を消す。

3. タバコと関連産業の歴史

(1)タバコ市場の変遷

年代	たばこの歴史	日本国内の出来事
16世紀後半頃	「たばこ」の伝来 ＊定説はない	
16世紀末(慶長期)頃	「たばこ」の文献・風俗画など出現	
1601年(慶長6)	フランシスコ会修道士が徳川家康に「たばこ」の葉と種子を献上	1600年 関ケ原の戦い
1603年(慶長8)	**「烟筒(キセル)」の初見** ＝袋中上人撰文『琉球往来』の「烟草事」	
1605年(慶長10)	**堺でタバコ庖丁の製造が始まる**	
1609年(慶長14) ～	「たばこ」の喫煙・」売買・栽培の禁令 以降、「たばこ」の禁令が度々公布される	1612年 幕府直轄地の「キリスト教の禁教令」

1623年(元和9)	・禁煙、売買禁止、耕作禁止など	
1624年(寛永元年) 寛永年間	「たばこ」の喫煙が許される 「タバコ」に課税して収入を得る藩が現れる	1625年　薩摩に甘藷(サツマイモ)が初めて移植
1631年(寛永8)	島根・温泉津で「葉タバコ」に課税	
1634年(寛永11)	三重・八幡で「たばこ座」が許可される	
1655年(明暦元年)頃	**刻みタバコの製造販売が始まる** 「タバコ専門店」の出現＝「細刻みタバコ」の製造販売　　＊以前は買手が自身で刻み喫煙	1657年　明暦の大火
1670年(寛文10)	本田畑での「タバコ」栽培の禁止 ＝幕府は米の耕作地の減少を恐れた	
1697年(元禄10)	秋田藩で「刻みタバコ」に課税	
1702年(元禄15)	本田畑での「タバコ」栽培を公認	1702年　赤穂事件
1804年(文化元年)	阿波で「かんな刻み機」が考案される	1808年　江戸湾に砲台
1872年(明治5)	「紙巻タバコ」の販売開始 ＝旧彦根藩士の土田安五郎が「巻弘社」設立	1872年　新橋・横浜鉄道開通
1898年(明治31)	**「葉煙草専売法」施行** ＝国が葉タバコを買上げ	
1904年(明治37)	**「煙草専売法」施行、大蔵省に煙草専売局設置** ＝国が「タバコ」の製造・販売を管理	1904年　日露戦争が起こる

(2)堺のタバコ関連商人

①江戸期のタバコ関連商工業者　～『左海鑑』、『堺手鑑』「諸工商諸師」等などから～

	業態	左海鑑 (17C 末)	延享4年 (1747)	文化10年 (1813)	備考
煙草包丁関連	タバコ庖丁鍛冶	23軒			
	多葉粉庖丁屋		2軒		
	タハコ庖丁株			31株	煙草包丁鍛冶仲間
	多葉粉庖丁仲買				
	多葉粉庖丁ひすみ附		10軒		“ひすみ”は歪のことか？
	多葉粉庖丁研屋		15軒		
煙管関連	キセル鍛冶屋	64軒	51軒		
	きせる磨屋		25軒		
	きせる毛彫屋				
	きせる直し屋				
	きせる屋		32軒		元禄8年(1695)は93軒
	きせる仲買		2軒		
タバコ関連	多葉粉問屋	40軒	1軒	8株	
	多葉粉仲買		32軒		
	葉たはこ小売				元禄8年(1695)は155軒
	多葉粉小売		85軒		
	刻多葉屋		76軒		

出典:『博物館館報　第24号』「江戸時代堺の産業一覧」 吉田豊　より抜粋

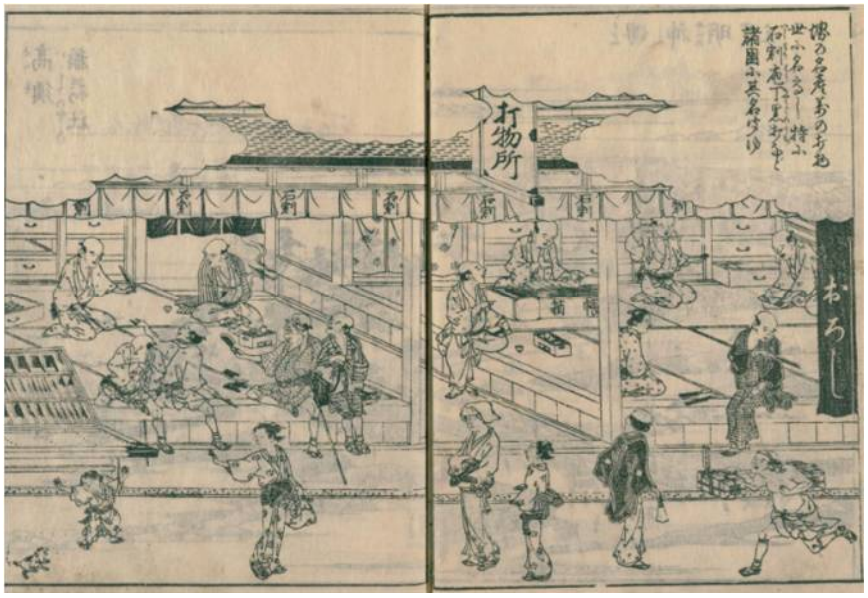
【参考】 文献に表れる「タバコ」の表記文字の色々

・煙草、莨、烟草　　(法律では、「煙草」が使われている。「煙草専売法」)

・たはこ、たばこ、タバコ　　(「タバコ」は外来語なので本来は「タバコ」と表記するが、渡来が古いので外来語の意識が薄い)

・当て字;　淡婆姑、丹波粉、多葉粉、相思草、金糸烟など

【参考】『和泉名所図会』に描かれた「石割庖丁」の販売風景　出典:国立国会図書館デジタルコレクション



煙管と刻タバコ

タバコ庖丁(堺市博物館蔵)

【参考】「刻みタバコ」と「タバコ庖丁」

江戸時代の「刻みタバコ」製造手順　(出典:　JT　HP)

手刻みで髪の毛程の太さに細く刻む

【参考文献】

『堺の伝統産業』 堺市経済局工業課　1985

『たばこの日本史　七話』 菊間敏夫(JT インターナショナル・たばこ史研究員)　文藝春秋　企画出版部　2016

『歴史学研究　第384号』

「18世紀における手工業技術の流出と市場構造　堺煙草包丁鍛冶仲間の場合」 乾宏巳

『世界喫煙伝播史』 鈴木達也　思文閣出版　2015

論文「近世におけるタバコ作の展開」 岡光夫

(同志社大学学術リポジトリ　紀要論文　経済学論叢巻33号　1984年発行)

『堺市博物館報　第24号』「江戸時代堺の産業一覧」 吉田豊　2005

HP:　JT たばこの歴史・文化 | JT ウェブサイト (jti.co.jp)